

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

敬神尊皇 黎



明報恩感謝

監修/日刊ひぐらし 〒151-0071東京都渋谷区本町1-30-18-107 <http://www.higurashi.net/> 第0017号
護國青年會議 <http://www.gokoku.net/> 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成17年9月24日

陸上自衛隊公開演習を見学して 白皇社相談役//塩崎逸雄



前夜、白皇社井之上浄誓会長より「明日用事が無ければ陸上自衛隊の公開演習を見に行きませんか？」との誘いがあった。大した用件も無く、刺激的とも言えない惰性の如き毎日を送っている現況で、断る理由など何処を探しても見当たる筈もなく、即決で誘いを承諾した。

運悪く大型台風が、静岡方面に上陸する可能性が高いという予報が出される中、午前7時半に迎えに来てもらった車に乗り込み出発した。悪い予報は当たる確率が高いが、台風の予報は最新鋭のレーダーでの予報であり外れる筈もなく、目的地の御殿場の東富士演習場一帯は強風を伴う豪雨であった。8時45分、海老名PAに到着し、同行者の皇政義塾・杉田普氏の到着を待つ間も、台風の特徴である「ちぎれ雲」は飛ぶように空を覆い、雨足は強まる一方であったが、車のラジオで中止の報道はなく、杉田氏と合流後、降りしきる豪雨の中

9時45分、御殿場でバスに乗換え、自衛隊駐屯地施設や米軍私設が立ち並ぶ中を通して東富士演習場に到着した。

10時20分、定刻通り演習開始となった。開始当初は霧やモヤの影響で大砲発射後の着弾地点は目視不可能であったのだが次第に良好な視界と変化し、演習終了までの間は何とか豪雨が収まっていたが、終了したと同時に土砂降りとなったことに、これこそ神仏の計らいであるかの感もあり、皇太子殿下御成婚パレードの時と同様の様相に我々の国、日本が神国と呼ばれる所以らしきものを再度感じ取る瞬間でもあった。

自分自身、兵器の実弾発射を見るのは初めての体験であり、その迫力に圧倒されっ放しであった。耳を劈くような轟音と、腹の底に響き渡る発射時の空気振動は、不思議にも不快なものと感じられず、逆に長年の平和な生活に怠惰していた日本人の遺伝子が、覚醒されて呼び起こされる様な何とも心地好ささえ感じられるものであった。この感覚は正常な男と言うよりも、日本男児であれば誰もが感じるものではないだろうかとの確信に近い自問もしていた。

実弾演習は何もかもが驚愕の連続であった。特に戦車の砲身から発射される砲弾のスピードは想像を遥かに超えており、発射の瞬間に遥か遠方の標的に命中するという、射撃の正確さは神業かとも思う位で驚異的なものであった。近代兵器の大半は心臓部にコンピューターが内蔵されていることから、命中精度が高いという購読知識は有ったものの、実際に実物から発射されるのを目の当たりにすると、人海戦術などは太古の戦争手段でしかない事を実感したのである。

米国の最新鋭兵器の心臓部が全て日本製であるという、拭いようがない事実を、日本人が知らなさすぎる事の恐さを改めて考えさせられ、日本という独立国家の主権が墮落退廃のままで現状維持で推移する事の恐ろしさも、誰かが声を大にして苦言し続ける重要さを強く感じられ、民俗派愛国者団体の活動家として極めて異議深い一日であったことは異論の余地などある筈がない。

日本民族の優秀性を最も認識しているのが先の大戦で勝利した米国である。それ故に、日本民族の優秀性を崩壊させる事を目的とした憲法を押しつけたのである。イデオロギー面で米国と相反する共産主義被れの非国民の集団が、平和憲法として擁護するという、矛盾と知ってか白ばっくてか、或いは、その両方なのか、本来の日本人からすると唾棄すべき日本人の姿をした似非日本人の、チャンコロ的厚顔無恥ぶりに日本中が何時まで振り回されていなければならないかとの義憤は強まるばかりである。

我国の先進産業が、一旦軍需産業化した際には『ユダヤの死の商人』と呼ばれる米国経済の主要部分を占める軍需産業を凌駕することへの危惧を彼等は常に持ち続けていたのだが、恐れられる本家本元の日本は、惚けた平和意識の下に、国益を損ない続けている危険性を、何故に認識しようとししないのだろうか。

本来、外交政策とは互いの国家間の国益の凌ぎ合いであるのだが、喧嘩の仕方も知らない二世三世議員が、国際貢献の美名の下に「資金援助することが外交である」との稚拙で馬鹿げた無責任風潮が数十年も継続されている。恐がる相手には更なる恐怖を与える事こそ国益重視の外交であって、結果として、

日本人が幸せな生活ができるのなら異存は無いはずである。対支那然り、対朝鮮然り、はたまた米国も同様である。最新鋭兵器が宝の持腐れでしかない現行憲法を、改正などの手緩いもので机上の空論をしている場合ではない。日本民族愚民化を目的とした憲法など、即刻廃棄して新たに国益重視の新憲法を制定する時期というよりも遥かに遅れていると言うべきである。日本国民の幸せは、娯楽や趣味に現を抜かすことではない。日本人の本当の幸せは、他国に干渉されず、日本人として誇り高く毅然たる姿勢で暮らせる世の中を創造することであり、腑抜政治家も性的不能者の如き官僚も、そのことに気付かぬのなら、荒療治を加えても気が付くようにするべきである。人間社会も動物の世界も、現実には弱肉強食の自然摂理で生態系が維持されていることは否定できない。斯かる観点からは『平和』は夢物語であり絵空事でしかないことは、太古の昔から現代も変わらず、それが地球上から未来永劫なくなる事など有り得ない。

自国民の平和維持のために武力（軍事力）が必要であり、強力な程に大きな抑止力となることは、諸々の歴史が証明していることを、今一度噛み締めなければならない。

以上、陸上自衛隊公開演習見学後の感想として綴る。

平成17年8月25日

衆院選の結果と今後の日本

編集人 / 戸出蒼流

「296」の持つ意味 9月12日夜、各局の出口調査の結果を見て我が目を疑った。予想されていたこととは言え、そこまで自民党が勝つとは半信半疑であったが、やがて現実となって眼前に示された。

首相は就任以来4年5ヶ月、「改革」を言い続けて来たが、道路公団民営化に代表されるように、実のある改革は、ほとんど成し得なかった。その本人が自分の無為無策ぶりを人目のつかない場所に隠して「郵政民営化は構造改革の本丸です。」「改革を止めるな！」と叫んだ。するとB層（首相の言うIQの低い人や女性、老人など）を中心とする大衆は、郵政で満足な対案を示せなかった民主党に見切りをつけて「そうだ首相の言う通りだ」と怒涛の如く首相のもとに結集し、自民党に大勝利を齎した。

国民が何を基準に自民党を選択したのか推測の域を出ないが、民主党幹部はイメージの持つ重要性和劇場型選挙の脅威を思い知らされたに違いない。何れにしても国民は首相に「296」という空前の議席を与えたのである。この「296」という数字の持つ意味は強大で、首相にフリ-ハンドを与えたこととなり、首相と同じ船に乗り合わせた運命共同体となったことを、国民は認識すべきである。

民主党は何故惨敗したのか？ 民主党が大きく議席を失った原因は何か・・・、ひと言で言えば民主党が無党派層の意を汲み取れなかったことに尽きるし、そのことは衆目の一致することである。にも拘らず岡田代表を始めとする党幹部は「我々の訴えは今でも正しいと思うが、(国民に)理解して貰えなかった」と原因を国民の側に求めている。民主党が斯様な体質を改め、国公労と絶縁しない限り、政権交代など絵に描いた餅となり、論ずることさえおこがましい。

政策面に目を向ければ、憲法・外交・防衛・教育・経済全ての面で党内のコンセンサスが得られないため一貫性が無い。何故合意が得られないかと言えば、左右に翼を広げすぎているということに他ならない。特に左の翼には大きな欠陥がある。例えば副代表の岡崎トミ子参院議員がそれである。岡崎議員は韓国での反日デモに参加して、日本大使館に向かってこぶしを振り上げ、朝鮮人と一緒に反日を叫んだ売国議員である。岡崎トミ子や横路孝弘のような旧社会党の流れを汲む反日議員を排除し、国家の利益と国民の幸福を優先する真の国民政党への道を模索しない限り、民主党の明日は無い。

暴走を止めるのは誰か？ 今度の衆院選で自民党は稀に見る大勝を収めた。裏を返せば圧倒的多数の国民が、小泉首相を支持したということである。その圧倒的多数の国民の中に、「自民党に296の議席を与えたことは、首相に白紙委任状を渡したことに等しい」と気付いた人は、どれ程いるのだろうか？

白紙委任状を手にした以上、国家の舵取りは首相の意のままとなる。郵貯・簡保は米国の意を汲んだものとなり、過疎地の郵便局は何れ消滅する。議員年金は保障されるが、国民年金の保険料は上がり、給付金は下がる。サラリーマン増税と消費税率アップは確実に行われる。在日外国人に参政権が与えられ、人権擁護法の名の下に、在日は益々優遇される。拉致被害者は放置されたまま北朝鮮との国交は正常化される。春暁ガス田の資源は一滴残らず支那に持っていかれる。竹島は韓国に占領され反日の怒号は日本海にこだまする・・・。これらの事は、決して絵空事ではない。想い起して戴きたいのは、4年前の「何があっても8月15日に靖国神社に参拝する」と言った首相の公約である。その後5回も機会が有りながら、尽く約束を反故にし、公約の不履行を追及されると「この程度の公約を守らなくても大した問題じゃない。」と開き直ったのは、首相本人である。我々は、そのことを決して忘れてはならない。やると言った事は反故にし、やらないと言った事は実行する、詐欺師のような首相の暴走を止めるのは、小泉純一郎を支持した国民に他ならない。国民は白紙委任状を撤回して、首相の言動を監視し、体を張ってでも暴走を止めなければならない。日本丸が闇の海に漂流しないことを切に祈る。



対照的な表情の両党首